

## 〈癒し〉関連語彙の系譜学 —癒しという営みの内包と外延—

鈴木七美

キーワード：癒し、治療、医術、ウィクリフ聖書、欽定訳聖書

### 1. はじめに—「癒し」という領野

医療人類学という領域を講ずるにあたって、第一に問題となるのは、「癒し」という領野がいったい人のいかなる営みを包括するものであるかということである。それは、すなわち多様な文化における「癒し」の行為とその思想の拡がりやを問うことである。

そうした試みの一つとして、1998年度には、「医療人類学」の講義に二人の講師を招き、「癒し」に関連するとそれぞれが考える分野に関して話していただいた。

その一人、周禪鴻氏（東京大学）は、台湾出身のチベット仏教研究者で、チベット医療に造詣が深くその実践者でもある。講義の冒頭で、周氏は、「医」がかつては「醫」と記されていたと述べ、この「醫」の部首「医」には占いに用いる「矢」の意が、また、部首「酉」には「酒」の意が含まれていることを指摘した。漢字文化圏において、「医」はシャーマンや巫女が行う占いと深く関連し、「医」の術として酒を嗜むことが含まれていたというのである。

「占う」という行為に関し、周氏は、「學」とも書かれた「学校」の「学」もまたその意を含むと述べた。爾来学校とは、周りに水が流れる集落の真ん中に位置し、

人々が日常生活の節目に出かけ、農作物を集め、宴会を催し、祭礼を行う場所であった。占いの結果を皆に伝え、酒を酌み交わしつつ語り合う祭祀空間であったというのである。さらに彼は、「教育」の「教」は、中国の初めての本格的辞書『説文解字』や甲骨文字を参照すると、その左部分が、卦の基本記号「爻」および占いの道具である11月に芽が出たばかりの薯草を表す「子・𠄎」から、右部分が手で「ト」すなわち「亀ト」をもつことを表し占いを象徴している「支・攴」から成り、これまた占うことを指していると説を展開した。「癒し」の根幹をなす「占い」は、「学」・「教」に通底する基本的行為だというのである。

周氏の指摘<sup>1)</sup>から、「癒し」の営みが、現代に生きる私たちが通常「治療」と考える行為、すなわち、客観的な検査結果や現代医学が明らかにしてきた病因・病理に関する諸説に基づく対抗的処置とは、異なる文脈で拡がっていたということができよう。

いま一人の講師、白水浩信氏（立正大学）は、「マスターベーション」の歴史を辿り、古来子をもうけ地上に満ちよという神の掟に背いた罪として弾劾された「オナンの罪」が、その意味を変容しつつ18世紀以来整備されはじめた膨大な医学言説によって身体の危機をもたらすもの、すなわち自殺行為であると断じられるに至った経緯

を明らかにした。さらに、単なる個人の罪から、子どもを損ないひいては種の将来に重大な影を落としかねない問題として捉えられることによって、「マスターベーション」は「社会的問題」として浮上し、これを予防することが「愛情」に満ちた親の務めであり、社会的機関が取り組むべき課題であるとされたのである。こうして、個人の愉しみやその空間に、家族や社会が責任主体として介入するようになったのである。それは、「医学」という名のもとに発せられた諸言説の集合体の増加と普及なしには考えられない事態であった。「医」は、警察的予防的諸権力（ポリス）および「愛情」の個人への介入に見られるように、その整合性・適合性を謳うことによって、社会的・私的力が個人—身体への配慮—に及ぶ媒介をなすものでもあるというのだ<sup>2)</sup>。

これら二人の講師の語りによって照らし出されたのは、「医」の世界が歴史的にみて決して一枚岩ではなかったこと、その領野が従来包含していた広野を再び経巡ることは、私たちにとってかけがえのない営みを問い直させることにほかならないということである。

## 2. 「医」の原義

「医」という漢字の来歴を垣間見、「医」を冠した言説の登場を知ることによって、「医」の領域の歴史的拡がり近代の特殊性を予知することになった。じっさい、「医」という字に出会うと、すぐに近代的な病院や白衣をイメージするかもしれない。だがこの教育漢字「医」は、音でイ、エイ、訓でいや—すと読み、矢をいれておくもの、うつほを意味したという。旧字体は「醫」で、酒を意味する「酉」ときず（瘡）の意をもつ毆から成る。きずに酒をつけて消毒し、なおす意であり、転じてなおす人も指す。むかしの医者には巫がこれを兼ねていたので、醫を醫とも書いた。

「医」の意味するところは、一つは「医者」、そしていま一つは病いをなおす・苦しみを解き救うなど「いやす」ことであると記されている（阿部編 1972：235）。

「いやす」という言葉は「医す」とも書けるということだが、では例の「癒す」はどのようなか。「癒」は、「い—える」あるいは「い—ゆ」と読む。病気がなおるという意味のいえると、いやすという意味だと言う。この漢字からつくられる熟語の治癒や平癒を思い浮かべると、なにやらこの字には、自発的・自然的な「なおり」の響きを感じられなくもない。

ここでは、オックスフォード英語辞典(OED)<sup>3)</sup>によって、“medicine”, “healing”, “cure”など、「医」関連語彙に関し検討しよう。

### 1) “medicine”

“medicine”という語は、古フランス語、ラテン語“medicus”（医者 of 術）に由来する。語根“med”は、本来、留意する、医療する、という意である（川本他編 1995：1260）。“remedy”もこれに由来する。

オックスフォード英語辞典には、“medicine”の第1の意味として、病気(disease)の治療(cure)、緩和、予防、健康(health)の回復と保持に関する知と実践があげられる。狭い近代的な意味では、それらは医者(physician)のしごとには属すると観念されている。いずれにせよ、治療剤、食養生(diet)、習慣(habits)と生活条件の調整によって人間の健康を回復し保持する技術(art)を指す。ここに記された意味あいは、私たちが病気になり医者に頼る際の行為のみならず、健康なときや軽微な病の際に自分自身で行う養生術を含むものである。

第2の意味として、魔法の薬、惚れ薬(philtre)、毒(poison)など、人間および物質のパワーと指向性そして運命を変化

させるものがあげられている。例として、「賢者の石 philosopher's stone」<sup>4)</sup>、「鍊金薬<sup>5)</sup>・不老長寿の霊薬・万能薬 elixir」、化粧品などが列記されている。

第3の意味として、とくに北アメリカ先住民の呪文、まじない、魔力 (spell)、魔力 (charm)、物神 (fetish) すなわち「マニトウ manitou」(霊・魔・超自然的存在)を指し、さらに魔力をもつ儀式 (ceremony) そのものまで含まれるとされる。

オックスフォード英語辞典に記されている“medicine”の用法を拾い上げることにより、この語が、近現代の医者による治療という意味を越えて、個人の生活の質 (quality of life) への関心とそれに関わる術にまで及ぶものであることが理解された。さらに、病治しや健康を求めることにとどまらず、人や物の状態や力を変化させる超自然的力の作用を意味し、集団の変化を促す儀式にまで“medicine”の意味が広がっていることをみることができた。

## 2) “healing”

“healing”は、古英語“haelan”に由来し、これはゲルマン語から派生している。

“haelan”は、“whole” (原義は完全な・健全な、原語は古英語“hal”，ゲルマン語から派生)と同語源である (川本他編 1995: 926)。

オックスフォード英語辞典によると、“healing” (“heling”とも表記される。語幹は“hele”)の第1の用法として、現在は方言となっているものの、「蓋をする、覆いをかける covering」, 「隠す concealing」, 「屋根を葺く roofing」などがあげられている。屋根瓦やベッド・カバーなど、覆う作業にもちいられる物も同様に、“healing”と表記される。実際、1602年の用法では、屋根を葺くためのスレートが、“healing-stones”と記載されている。

第2の用法として、「健康の回復 restoration to health」 「病気からの回復 re-

covery from sickness」 「治療 cure」など、現代の私たちにもなじみ深いものが登場する。とはいえ、「“healing”の方法は、しばしば祈禱書に印刷されているものであった」(1559年)り、「“healing”の後に、オニキスの石をはめこんだ指輪がなくなったり」(1676年)、「“healing”の際に、二つの銀のかけらが撒かれたり」(1876年)していたようで、健康の回復や治療には祈りやまじないが深く関連していたことがうかがえる。“healing”との連結語“healing-coin”は、王の悪 (king's evil) に触れた者を治すためにもちいられていた (1885年)。これらをもちいた一連の所作は、「癒しの術 healing art」(1857年)と概括されている。

様々の自然由来のものも“healing”の力を有していた。「癒しの水 healing waterが分析され」(1824年)，“healing-herb”としてコンフリー (comfrey) などが親しまれていた。病気の羊には、いつもバター・ミルクのなかで浸出した癒しの葉 (healing leaf) とスコッチウイスキーが効くとされていたのである (1799年)。動物由来のものとしては、象牙、クロテンの毛皮、じゃこうの香り、「癒しの角 healing-horns」などがその効能を信じられていた (1657年)。

第3の用法として、「修理する mending」, 「全体性、幸福と健康、安全性、繁栄の回復 restoration of wholeness, well-being, safety, prosperity」, 「魂の回復 spiritual restoration」, 「救い salvation」などが記載されている。これらは、身体に関わることのみならず、精神をも包括する全体的な生の望ましい状態を回復するという意味であろう。まさに、「早朝の美しい景色は、彼の消耗しきった脳にやさしくはたらきかけた (touch healingly)」(1886年)といった表現に現れる癒しのありようである。

だが、なかには、「新しい統治者は、政治的な相違を緩和する (healing) ために

望ましい者であった」(1861年)というものもみられることから、個人の幸福や健康にとどまらず、集団間の政治的・社会的関係の調和という意味にも“healing”が使われていたといえよう。

こうした意味あいでも用いられる“healing”は、「この問いが、われわれにとって調和的問いかけ (healing question) となればうれしいのだが」(1659年)、「アダムは相手をほっとさせる言葉 (healing words) で応えた」(1667年)、「彼は、以下のような穏やかな調和的スピーチを、彼らに対し行った」(1767年)、「諸侯のなかには、調和させるための投票を行うためやってきた者もいた」(1859年)、などの用例もみられる。“healing”が、多様な社会関係の修復、調和の意を有していたことの証左といえよう。

屋根を葺く、カバーをかけるなどをも意味する“healing”の世界は、「臭いものに蓋をする」ではないが、なにかを完全に治したり、あるいは“medicine”における錬金術の世界のごとく変化や変身を促すというよりも、むしろ現在の状態を覆って痛まないようにし、調整し穏やかにさせることに関わる術と言えよう。人間の身体の傷も、心の疼きも、また人間関係の齟齬、集団間の軋轢も、そうやすやすと変化させ平坦なものとすることはできまい。“healing”は、人間が生きる営み全体の調整に関わり、人々がなんとか日常を周囲のものと共に歩き続けられるよう促す行為を指すと言えよう。

### 3) “cure”

“cure”は、古フランス語由来で、ラテン語“cura”より派生し、その語根“cur”は、配慮、心遣いといった意を含む(川本他編 1995:494)。“cura”の意味として、1 注意、世話、心配、関心 2 取り扱い、管理、保護 3 手入れ 4 看護、治療 5 監督、指揮 6 司令、指図、命令

7 行政、経営 8 研究、修行、著作 9 保護、監督 10 被保護者 11 不安、気遣い 12 恋愛者 13 愛人 14 苦悶、悩み、未練などがあげられている(田中秀央編 1992:164)。これらを一瞥すると、前節で検討した“healing”と比較して、保護や管理といったしごととその役割の担い手および保護・管理される者の存在が浮かび上がってくる。恋愛者や愛人も、格別の気遣い、監督が必要であるということだろうか。セネカ(前4-後65)も、「真剣な絶え間のない気遣い (cura) をもって動揺する心 (anima) を包んでやらねばならぬ…」と述べている(セネカ 1980:118)。

オックスフォード英語辞典に記載された“cure”の第1の用法は、世話をする (to take care of)、心にかかる (regard) である。その行動は、「この司祭は、彼の責任 (charge) を注意深く、勤勉に果たした (curyng)」(1581年)の用法にみられるように、責任を果たすという文脈で用いられている。

第2の用法は、癒す (healing) ために、外科的・あるいは医学的に病そのものや患者を扱うことである。病人や病気を癒し、健康を回復させる行為を指す。だが、医者のみがその行為をするのではなく、「自然そのものが患者を治す (cureth)」(1538年)のように、病気を治すものとして「自然」も言及されていた。

患者は、身体的不調のみを呈するとは限らない。「いくら失望しても、われわれはなかなか期待することをやめられ (cures) ないものである」(1758年)、「時が彼の悲しみを癒した (cured)」などの用法は、心的な苦しみや習慣化した志向性をも対象に含むことを示唆している。

治す方法がもつ方向性は、修繕する (repair)、壊れたものはなんでもよくする (make good)、あるいは取り除く (remove) という説明に表れているように、“healing”と比較すると、蓋や覆いをす

るのではなく、より積極的に損傷部分を取り出すという外科的なものである。「かれは煙だらけの煙突を一つならず掃除する (curing) ことに成功した」(1872年) というようにのどかな用法がみられる一方で、「治療 (cure) を有効なものにしようとするれば、しばしば殺すこと (kill) にもなりかねない」(1593年) という覚悟を促す用法もあり、「たまには治癒 (cure) できることもあるとはいえ、常にお墓行きを免れさせる医学 (medicine) などない」(1787年) ともいわれることになる。

“cure”の第3の用法は、食物に関するものである。肉、魚、果物、タバコなどを、塩漬け、乾燥するなどして、保存することを意味する。ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』にも、「葡萄は、太陽に干して保存する (cure) とよい」(1719年) と記されている (デフォー 1997 [1967]: 137)。「バルバドスでは、砂糖が乾燥するのに6週間かかるのに対し、ジャマイカではより早く10日で乾く (cures)」(1668年) とも観察していた。

第4の用法は、第3の用法のごとく食物にはとどまらず、草木を伐採し大地を拓く (to clear land) という意味をもつ。その目的は、例えば穀物を得ることである。

『ロビンソン・クルーソー』には、「われわれは、広大な土地を拓き (cured) 刈り込み手入れし、22ブッシェル<sup>6)</sup>もの大麦の種を播いた」と、得意気に記されている。

さらに、第5の用法として、ゴムを硫化し、プラスチックを固めるなど、工業製品の品質を高めるために行う化学的処理が記載されている。グッドイヤー・タイヤにおいては、「ゴムを乾燥させ硫化させる (curing) いくつもの実験を行い、発明者は得心のいく結果を得た」(1853年) と報告されている。

第3・第4・第5の用法は、いずれも、“cure”の意味するところが、人間に対する処置とは限らず、人間が利用するために、

物を加工し環境を変化させる試みを含むことを示しているのである。

最後に、第6の用法として、より生活水準を上昇させてきた人間たちが次に思いつくこと、すなわち、健康によい処方に従って暮らすヘルス・リゾートにしばし引きこもることがあげられている。「ダヴォス<sup>7)</sup>にリゾートに (cure) やってきた人々」(1902年) は、「バルコニーにたむろしたり、湖に漕ぎ出したりするのであった」(1905年)。このように、生活に必要なものを得ることができるようになった人々は、病気でなくとも、いつときより心地よい場所を求めようになるのだろうか。19世紀アメリカで人気を博した緑豊かな地に建てられた豪華な水治療の施設も、しばしば親しみを込めて“cure”と呼ばれていた。

癒し関連語彙として“medicine”, “healing”, “cure”をとりあげ、オックスフォード英語辞典の用例からそれらの意味するところを検討してきたが、これらの語の特徴と考えられる点は以下のとおりである。“medicine”という語は、個人・集団の身体・魂における変化を促す行為とその媒介を指す。それは、超自然的なパワーをも含む。“healing”は、個人の痛みや社会的に危機と感じられる状況を、調整し緩和する行為を意味する。そして“cure”は、時には殺すことも辞さず不都合なものを取り除き、人間が生き延びるためにより適切な状況や環境を作り出すことに専心する。

そうした〈癒し〉の意味の広がりを念頭に置きつつ、次節では、オックスフォード英語辞典に例示された用法から推測されるこれらの語の意味合いが、西洋世界に多大な影響を与えてきた『聖書』のなかではどのように表現されてきたのかを、検討してみよう。

### 3. 『聖書』にみる癒しの世界

とはいえ、英訳聖書のみ限定した場合

であれ、ある語の用法を全て検索するだけでもあまりに多大の労力が必要とされる。しかし幸い、現在では、10世紀から20世紀のあいだに出版された英語で書かれた聖書の21の異なるヴァージョンを取めた *The Bible in English: 21 different versions of the English Bible: from the 10th to the 20th Century*, Chadwyck-Healey, 1996, というCD-ROMが入手可能である。といっても21種全ての分析は手に余るので、ここでは、イングランド初の英訳聖書と通常呼ばれる1384年頃の出版になるウィクリフ聖書 (Wycliffe [Early]) と、英語の標準化に力のあった1611年出版のいわゆる欽定訳聖書 (*King James Bible*) の二つをテキストとして分析してみよう。

### 1) “healing”

“healing” は、全21種の英訳聖書のなかに、130件登場する。ところが、1384年頃出版のウィクリフの英訳聖書には、“healing”, “heale”, “heal” とともに一度も使用されていない。一方、1611年に出版された、いわゆる欽定訳聖書として知られる *King James Bible* には、以下の15件 (第1の文例に2件含まれている) 記載されている。この欽定訳聖書において“healing”はいかなる意味あいで使用されているのかを検討しよう。またいくつかの文章について、ウィクリフの英訳聖書ではどの語をもちいて訳出されているのかを見てみよう。  
[ ] 内は、ウィクリフの英訳で使用されている語である。日本語訳は全て、日本聖書協会『聖書』口語訳 (1998年, 新訳1954; 旧約1955) を利用した。

1 「あなたはまったくユダを捨てられたのですか。あなたの心はシオンをきらわれるのですか。あなたはわれわれを撃ったのに、どうしていやしてはくださらないのですか (...there is no healing for vs? [ther is noon helthe?])。われわれは

平安を望んだが、良いことはこなかった。いやされる時 (the time of healing [tyme of curing]) を望んだが、かえって恐怖 (trouble) が来た。」(Jeremiah 14 : 19)<sup>8)</sup>

- 2 「あなたの訴えを支持する者はなく、あなたの傷をつつむ薬はなく、あなたをいやすものもない (...Heb. For binding vp, or pressing. that thou mayest bee bound vp: thou hast no healing medicines [of curingus]).」(Jeremiah 30 : 13)
- 3 「あなたの破れは、いえることがなく (There is no Heb, wrinkling. healing of thy bruise...), あなたの傷は重い。あなたのうわさを聞く者は皆、あなたの事について手を打つ。あなたの悪を常に身に受けなかったような者が、誰ひとりあるか。」(Nahum 3 : 19)
- 4 「しかしわが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている (...with healing in his wings...)。あなたがたは牛舎から出る子牛のように外に出てとびはねる。」(Malachi 4 : 2)
- 5 「医者 (healing) はいと高さものから出たもの 医者は王者たちからも報いを受ける。」(Ecclesiasticus 38 : 2)<sup>9)</sup>
- 6 「イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え (teaching), 御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった (...healing all maner of sicknesse, and all maner of disease among the people. [helynge]).」(Matthew 4 : 23)
- 7 「イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった (...healing eury sicknesse, and eury disease among people.)」(Matthew 9 : 35)
- 8 「弟子たちは出て行って、村々を巡り歩

- き、いたる所で福音を宣べ伝え、また病気をいやした (...healing euery where.)。 (Luke 9 : 6)
- 9 「ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療を要する人たをいやされた (...healed them that had need of healing.)。」 (Luke 9 : 11)
- 10 「そのしるしによっていやされたのは (...this miracle of healing was shewed.)、四十歳あまりの人であった。」 (Acts 4 : 22)
- 11 「神はナザレのイエスに聖霊 (holy ghost) と力 (power) とを注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また悪魔におさえつけられている人々をことごとくいやしながら (...healing all that were oppressed of the deuil...), 巡回されました。」 (Acts 10 : 38)
- 12 「またほかの人には、同じ御霊 (spirit) によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物 (the gifts of healing)」 (I Corinthians 12 : 9)
- 13 「みんながいやしの賜物 (the gifts of healing) を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか。」 (I Corinthians 12 : 30)
- 14 「都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みどり、その木の葉は諸国民をいやす (...for the healing of the nations.)。」 (Revelation 22 : 2)

1 から13まで、欽定訳『聖書』に“healing”と記載された部分をあげた。これらのなかには、イエスの病癒しの奇跡を語るものも多く含まれているが、それだけではなく、人々の心の苦しみを軽減し社会的危機

状況を打開するという意味でも用いられているのがわかる。14の「ヨハネの黙示録」では「いのちの木の葉が、諸国民をいやす」のである。

他方、1611年の欽定訳とは異なり、それ以前、1384年頃のウィクリフ英訳聖書には“healing”が見られなかったのだが、しかし反対に、“hele”はウィクリフの聖書に17件記載されており、欽定訳ではまったく使われていない。欽定訳で“healing”となっているものも、1や2の文例にみられるように、ウィクリフ聖書では“curing”や“curyung”という語で語られていたのである。

まずは、ウィクリフ訳の聖書にみられる“hele”の用法のいくつかをあげてみよう。

- 1 「主よ、わたしをいやして (Hele) ください。そうすれば、わたしはいえます (helid)。わたしをお救いください、そうすれば、わたしは救われます。あなたはわたしのほめたたえる者だからです。」 (Jeremiah 17 : 14)
- 2 「主は言われる、わたしはあなたの健康を回復させ、あなたの傷をいやす (helen)。それは、人があなたを捨てられた者と呼び、『だれも心に留めないシオン』というからである。」 (Jeremiah 30 : 17)
- 3 「あなたは自分のために大いなる事を求めるのか、これを求めてはならない。見よ、わたしはすべての人に災いを下そうとしている。しかしあなたの命はあなたの行くすべての所で、ぶんどり物としてあなたに与えると主は言われる。」 (Jeremiah 45 : 5)
- 4 「イエスは彼に、『わたしが行ってなおして (hele) あげよう』と言われた。」 (Matthew 8 : 7)
- 5 「行って、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ。病人をいやし (hele), 死人をよみがえらせ、らい病人をきよめ、悪霊を

追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい。」(Matthew 10:7-8)

- 6 「主よ、わたしの子をあわれんでください。てんかんで苦しんでおります。何度も何度も火の中や水の中に倒れるのです。それで、その子をお弟子たちのところに連れてきましたが、なおして (hele) いただけませんでした。」(Matthew 17:15-16)

ウィクリフの英訳聖書では、“healing”ではなく、いまでは方言としてしか用いられなくなった“hele”が、身体の傷そして苦しんでいる人そのものを救う行為を意味する語として登場している。“hele”が時とともに、“heal”に変化したとも考えられる。

だが、ウィクリフの英訳聖書には“healing”が見られなかったのだが、それらが“hele”と記載されているわけでは必ずしもなく、欽定訳聖書で“healing”と記された語は、ウィクリフの英訳聖書では、“curing”, “curingus”, “helynge”などの語で訳出されていた。ここでは、“cure”の語が、病治しのみならず、より広い意味で用いられていたと考えられる。

## 2) “cure”

そこで次に、同様に“cure”を検討してみよう。“cure”は全21種の英訳聖書に210件記載され、うち欽定訳*King James Bible*には以下の5件(第1文例中に2件)の“cure”がみられる。

- 1 「見よ、わたしは健康と、いやし (cure) とを、ここにもたらしめて人々をいやし (cure), 豊かな繁栄と安全とを彼らに示す。」(Jeremiah 33:6)
- 2 「エフライムはおのれの病を見、ユダはおのれの傷を見たとき、エフライムはアッスリヤに行き、大王に人をつかわした。

しかし彼はあなたがたをいやす (heale) ことができない。また、あなたがたの傷をなおす (cure) ことができない。」(Hosea 5:13)

- 3 「それで、その子をお弟子たちのところに連れてきましたが、なおして (cure) いただけませんでした。」(Matthew 17:16)
- 4 「それからイエスは十二弟子を呼び集めて、彼らにすべての悪霊を制し、病気をいやす (cure diseases) 力と権威とをお授けになった。」(Luke 9:1)

ここにみられる“cure”は、1では、戦ったユダやイスラエルの民の傷を治そうという決意を語った部分であり、2, 3, 4も身体の傷や病 (diseases, 3においてはてんかん) を治すという意味で用いられている。2ではいやす (heale) という言葉もみられるが、“cure”はよりなおす対象が明確な場合に用いられているといえよう。

“cure”は、ウィクリフの英訳聖書ではさらに多く、30件みられる。その全てを掲げるわけにはいかないので、5例だけの引用にとどめるしかない。

- 1 「すべての者の主にいます方は人の顔を恐れず、人の偉大さを心に掛けない。何故なら小も大も彼自らが造ったのだしすべての者を彼は同様に心にとめられる (cure) から。」(Wisdom of Solomon 6:8)<sup>10)</sup>
- 2 「教えに想いをこらす (cure) ことは愛である。愛は知恵の法を守ることであり、法に固く着くことは不滅を確保すること」(Wisdom of Solomon 6:19)<sup>11)</sup>
- 3 「あなたの他に神はなく、すべての者に心を配る (cure) 者もないからだ。それであなたが不正な裁きをされぬのを示す必要などないわけだ。」(Wisdom of Solomon 12:13)<sup>12)</sup>
- 4 「だが彼はやがていなくなる自分や短命

な自分のことは気にもせ (cure) ず、金細工人や銀細工人と争い青銅細工の工人をまねしたりしてにせ物を作ることを光栄としている。」(Wisdom of Solomon 15 : 9)<sup>13)</sup>

- 5 「ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療 (cure) を要する人たちをいやされた (...healide hem that hadden nede of cure)。」(Luke 9 : 11)

ウィクリフの英訳聖書における “cure” は、「配慮する」という意味で圧倒的に用いられている。欽定訳聖書にみられた「病気を治療する」という意味は、ほとんどみられない。

ちなみに、ウィクリフの英訳聖書と欽定訳聖書を一部対応させてみよう。ウィクリフの英訳聖書において “cure” と訳されていたものが、後の欽定訳聖書ではどのように訳出されているだろうか。

- 1 「すべての者の主にいます方は人の顔を恐れず、人の偉大さを心にかけない (stand)。何故なら小も大も彼自らが造ったのだし、すべての者を彼は同様に心にとめられる (careth) から。」(Wisdom of Solomon 6 : 7)<sup>14)</sup>
- 2 「力ある者には厳しい検査しべが臨む (come vpon)。」(Wisdom of Solomon 6 : 8)<sup>15)</sup>
- 3 「知恵の真の始まりは教えを切に求めること、教えに想いをこらす (care) ことは愛である。」(Wisdom of Solomon 6 : 8)<sup>16)</sup>
- 4 「あなたの他に神はなく、すべての者に心を配る (careth) 者もないからだ。それであなたが不正な裁きをされぬのを示す必要などないわけだ。」(Wisdom of Solomon 12 : 13)<sup>17)</sup>
- 5 「だが彼はやがていなくなる自分や短

命な自分のことは気にもせず (Notwithstanding his care), 金細工人や銀細工人と争い青銅細工の工人をまねしたりしてにせ物を作ることを光栄としている。」(Wisdom of Solomon 15 : 9)<sup>18)</sup>

- 6 「わが子よ 病気になったときには放置せずに主に祈れ 主はいやしてください。」(Ecclesiasticus 38 : 9)<sup>19)</sup>

上記のいくつかの対応において、ウィクリフでは、“cure” と表現されていたものが、欽定訳では、“care” と訳出されている。14世紀のウィクリフの時代には、“cure” は、第1節で検討したようなラテン語の “cura” の世界を濃厚に映し出していたのだが、17世紀の欽定訳聖書に至るうちに、“cure” が狭義の “cure” (治療) と “care” (配慮) とに分化 (differentiate) して、“cure” は「病気を治療する」という意味に縮小させられたといえよう。

ウィクリフの英訳では “hele” と表現されている病癒しが、「マタイによる福音書」のなかに見られるように、欽定訳ではより縮小された意味をもつ “cure” と表現されるに至っていることも興味深い。つまり、「主よ、わたしの子をあわれんでください。てんかんで苦しんでおります。何度も何度も火の中や水の中に倒れるのです。それで、その子をお弟子たちのところに連れてきましたが、なおしていただけませんでした。」という「マタイによる福音書」(17 : 15-16) 中の “hele” (ウィクリフ英訳聖書) が欽定訳では “cure” で表されるようになるのである。

ウィクリフの聖書ではより広い意味で用いられていた “cure” の意味が狭められるに従って、“care” など新たな語による表現が必要とされるようになると同時に、かつて “hele” とされていたものが意味縮減を伴った “cure” で代替されるようになるのである。『聖書』の訳語を見ることによって、癒し関連語彙の意味縮減と新たな

より狭いあるいは明確な意味をもつ語が複数使用されるようになっていく様子が映し出される。

#### 4. おわりに—〈医〉の原像を巡る

オックスフォード英語辞典、14世紀のウィクリフによる初の英訳聖書、そして17世紀の欽定訳聖書のなかに、癒し関連語彙として“medicine”, “healing”, “cure”などがどのような意味をもってあらわれていたのかを訪ね歩いてきた。癒し関連語彙は、上記三種に決して限定できるものではない。だが今回、最初の試みとして、この三種をとりあげて比較検討しただけでも、少なくとも以下の点が指摘できよう。

なによりも、オックスフォード英語辞典に記載されている“medicine”, “healing”, “cure”は、それぞれ、広範な意味を有し、現代のこれらの語の語感からすれば、意外な用法も見られた。“medicine”は、病気の治療のみならず、まじないや、呪術に用いる様々な呪物、さらには、儀式そのものもこの語で表現されることがある。すなわち、個人や集団が現在の状態から離れ、一時であっても恍惚とした空間・時間を経験する様子を表現しているのである。

“healing”は、調和、調整的な意味を有し、その媒体は薬には限らず、言葉や景色なども上首尾にはたらく。個人の身体・精神のみならず、社会的関係にまで、効果が及ぶ。方言的・古語的用法“hele”は、「屋根を葺く」「覆いをかける」などの意味さえ有する。全体として“healing”は、傷や綻び、齟齬、軋轢を取り除くというよりは、人や人間関係の複雑さ・困難さを前にして、なんとかか不調和を仲裁し、緊張を緩和してゆく営みを指すといえよう。

これに対して、“cure”は、病気であれ、なんらかの問題であれ、取り除くという意味が強い。外科的処置によって、時には死を免れないことすらある。また、人間の食

糧の保存や土地を耕すことも含まれる。人間が自らと環境をより自分の利に適うよう加工し変化させる活動という色合いが濃い。

これら三種の語は、その意味するところのベクトルは、相互に異なるものの、すべて人間がこの世で出会う困難になんらかのかたちで対抗し生き抜こうとする姿勢が見られる。

だが、オックスフォード英語辞典にみられた広範な用法と比較すると、英訳聖書にあらわれた“healing”や“cure”の意味は限定されている感がある。“healing”はウィクリフの英訳聖書においては、古語的表記“hele”が用いられていても、その意味は、「屋根を葺く」「覆いをかける」などでは決してない。また、“cure”にしても、『ロビンソン・クルーソー』にみられるごとき「保存する」「乾燥する」などという意味は見あたらない。木々を伐採し土地を拓くといった、人間が生き延びるため環境を変化させるという活動は含まれない。しかし、人間に対する「配慮」という意味は、ウィクリフの英訳聖書の世界ではラテン語の意味世界を継承してか“cure”に息づいていたこと、またこれらの意味が17世紀の欽定訳聖書以降歴史的変容を遂げていることが示唆できた。

今後は、今回掬い取った癒しの様々な意味を新たな史料を用いて検討していきたい。例えば、癒す(cure) = 殺す(kill)を医神アスクレピオスの神話のなかに<sup>20)</sup>、癒し(cure) = 料理(preserve, salt...)という局面を古代ヒポクラテスの時代の史料によって辿ってみたいものだと考えている。

#### 註

- 1) 講義で周氏が言及した内容に関する参考として、周 1997; 周 1998があげられる。
- 2) 白水氏の講義内容に関する参考として、白水 1998 a : 213-231および白水 1998 b : 11-20があげられる。
- 3) *The Oxford English Dictionary*, Second Edition On Compact Disc, 紀伊国屋書

- 店, 1992年
- 4) 金属を金や銀に変える力を持つと考えられていた想像上の石。
  - 5) 卑金属を金に変えると信じられたもの。
  - 6) bushelは穀物計量の最大単位。(米)約35ℓ, (英)約36ℓ。
  - 7) スイスのリゾート地。
  - 8) Jeremiah 14:19, *King James Bible*, 1611 (*The Bible in English: 21 different versions of the English Bible: from the 10th to the 20th Century*, Chadwyck-Healey, 1996) 翻訳は, 「エレミア書」日本聖書協会『聖書』口語訳, 1998 (新約 1954; 旧約 1955) 年, 旧約 1071頁。
  - 9) 「集会の書」(ベン=シラの知恵), 関根正雄編『旧約聖書外典』上, 講談社文芸文庫, 1998年, 230頁
  - 10) 「ソロモンの知恵」6:8 関根正雄編『旧約聖書外典』下, 講談社文芸文庫, 1998年, 45頁
  - 11) 「ソロモンの知恵」前掲書, 47頁
  - 12) 「ソロモンの知恵」前掲書, 81頁
  - 13) 「ソロモンの知恵」前掲書, 96頁
  - 14) 「ソロモンの知恵」前掲書, 45頁
  - 15) 「ソロモンの知恵」前掲書, 45頁
  - 16) 「ソロモンの知恵」前掲書, 47頁
  - 17) 「ソロモンの知恵」前掲書, 81頁
  - 18) 「ソロモンの知恵」前掲書, 96頁
  - 19) 「集会の書」(ベン=シラの知恵), 前掲書, 231頁
  - 20) シェークスピアの『ヘンリー六世』では次のようなヨーク公の台詞がみられる。「この額は晴れやかにするか曇らせるかによって, アキレスの槍のように, 生かす(cure)も殺す(kill)も自在になるのだ。」(小田島雄志訳『ヘンリー六世』第二部, 白水社, 188頁)

参 考 文 献

阿部吉雄編

1972 [1964] 『漢和辞典』旺文社

- 1996 *The Bible in English: 21 different versions of the English Bible: from the 10th to the 20th Century*, Chadwyck-Healey (CD-ROM)
- ダニエル・デフォー
- 1997 [1967] 『ロビンソン・クルーソー』上, 平井正穂訳, 岩波文庫
- 川本茂雄他編
- 1995 [1994] 『講談社英和中辞典』, 講談社  
日本聖書協会
- 1998 『聖書』口語訳 (新訳 1954; 旧約 1955)
- 1992 *The Oxford English Dictionary*, Second Edition On Compact Disc, 紀伊国屋書店  
関根正雄編
- 1998 『旧約聖書外典』上, 講談社文芸文庫  
セネカ
- 1980 「心の平静について」『人生の短さについて他二篇』茂手木元蔵訳, 岩波文庫
- 白水浩信
- 1998 a 「18世紀における子どもの性と教育的配慮—英仏のマスターベーションについての指導書を中心に」『日本の教育史学』41
- 1998 b 「18世紀フランスにおけるポリスと教育—N・ドラマールとその周辺」『教育学研究』65-2
- 周禅鴻
- 1997 「教育の語源学(1)——〈教〉と〈師〉の原像」『研究室紀要』東京大学大学院教育学研究科教育学研究室、第23号
- 1998 「教育の語源学(2)——〈学〉〈校〉の原像」『研究室紀要』東京大学大学院教育学研究科教育学研究室、第24号
- 田中秀央編
- 1992 [1952] 『羅和辞典』研究社
- 山形孝夫
- 1978 「原始キリスト教における〈血〉と〈水〉の祭儀」『現代思想』青土社, 11月, 174-184頁

**ABSTRACT****A Genealogy of “Healing” :**

Some thoughts on the changing usage of therapeutic vocabulary in the English language

Nanami SUZUKI

Keyword : heal, cure, medicine, OED, Wycliffe, King James Bible

Nowadays, the word “healing” has become more popular day by day. However, the true depth of meaning of this word remains imperfectly understood.

In this paper, I have tried to explore the conceptional world delineated by the terms “heal” and “cure”, and “medicine”. Firstly, I studied these words closely in the *Oxford English Dictionary* (OED in CD–Rom) to find out what implications they carry in older English sentences.

Secondly, I have looked at useage of the same words in English translations of the Bible. In the cases of “healing” and “curing”, I have made an especially close analysis of two major bibles, one being Wycliffe’s ground-breaking 14th century translation, and the other the *King James Bible* translated in the 17th century.

By examining sentences in OED, we can see that the word “medicine” had a very wide range of meanings. It meant not only to treat a sick person with medicaments but also to make charms and spells used in a ceremony. The word “medicine” implied power to inspire people to depart temporarily from their daily lives and even to transform themselves.

The word “heal” had more practical meanings as well. Its central meaning, though it seems to be curious to us today, was to cover or conceal as in putting a roof over a house. “Healing” was promoted with the help of herbs, and all sorts of things were said to promote healing. A “healing speech” could reduce tension among people. The beautiful scenery and pure air of early morning was also thought efficacious in healing exhausted brain. As its origins imply, the word “heal” connoted the covering up of troubled or irritated places. Although “heal” did not always solve the problem, it helped people to live in harmony with others.

The word “cure” also had practical meanings. Sometimes it described the act of drying and cooking food in order to preserve it. It also meant to clear an area of wooded land of its trees. Since it also meant to remove a diseased part of the body by performing surgery, “cure” seemed to imply a solution to illness that entailed remaking the human body as well as its environment.

Each of these three words had different ranges of meaning. But at the same time,

it is certain that all of them reflect human attitudes to survival on the globe.

Compared with the meanings found in *OED*, the usage “healing” and “curing” in the two English bibles seems somewhat narrower. “Healing” never meant roofing and covering in *Wycliffe*, and “cure” is never used to mean cooking and preserving in the *King James*. The use of “cure” is limited to concern for others, in both body and heart. But it was a Latin tradition that the word “cure” meant to “care”.